大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

101

岡本玄治

名著出版刊

南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 101
岡本玄治
第Ⅳ期 全16巻

昭和五十八年十一月二十五日 発行

編者 大塚敬節
矢数道明
発行者 中村安孝
発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七―一〇五四番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社
印刷所 有限会社 伊藤印刷
製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347－1057－8324

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

岡本玄冶肖像(『醫家先哲肖像集』より)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

凡　例

一、本書第一〇一巻「岡本玄冶」には、『玄冶薬方口解』『玄冶方考』を収録した。

一、本書は全て影印版によったが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

『玄冶薬方口解』　版本　（明暦二年版）　一巻一冊（大塚恭男所蔵）

『玄冶方考』　版本　（寛文十二年版）　三巻一冊（京都大学医学部図書館所蔵）

一、解説は安井広迪（北里研究所付属東洋医学総合研究所）が執筆した。

岡本玄冶

安井広迪

岡本玄冶（一五八七～一六四五）は曲直瀬玄朔の高弟として、またその女婿として、更に三代将軍家光の侍医としてその名を知られる江戸初期の名医であり、学問的にも当時の医学界に与えた影響は極めて大きい。ここでは玄冶の生涯と人と為りを探り、合わせて彼の著書に若干の考察を加える。

岡本玄冶の生涯

岡本玄冶は天正十五年（一五八七）京都に生まれた。『寛永系図』によれば、呈譜左大臣胤三十二世の後裔とされ、先祖より代々京都に住んだという。父は岡本重信（左門空靖）といい、母は薄

左衛門佐光の娘と記録されている。

玄冶は、幼少の頃より典籍を学び、長じて曲直瀬玄朔の主宰する啓迪院に入門し、頭角をあらわした。入門したのは慶長七年（一六〇二）で、玄冶が十六歳の時であり、『皇国名医伝』は、十八歳にしてすでに講長に抜擢されたと記載している。この間の経緯はあまりよくわかっていないが、『寛永系図』では、啓迪院で学ぶこと六年にして家に帰り、慶長十五年（一六一〇）に学頭となり、学舎にありて医書を講読し、薬剤術、配剤の事を諸徒に教授したと記載している。

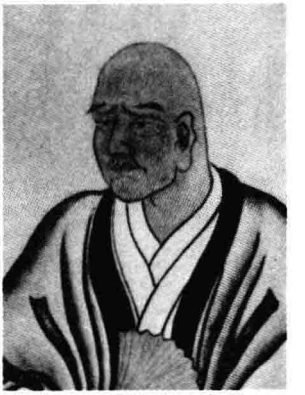

図1　岡本玄冶肖像

いずれにしても、入門後早くから頭角をあらわし、比較的若くして啓迪院の指導的地位にいたことがわかる。そして、おそらく慶長の末に妻帯した。師玄朔の娘を娶ったのである。

玄冶が医師としての活動を開始し始めた頃は、すでに徳川の世となり、京都の名医達の中にも江戸幕府に重んじられる人が多く見られるようになった。玄冶もその一人で、慶長年中に伏見で始めて家康に拝謁し、元和九年に家光が京都に来た時に召され、その後隔年で江戸と京都に住むようになった。その間元和四年（一六一八）法眼に叙せられ、寛永五年（一六二八）法印に昇進している。彼はもともと師玄朔より啓迪庵の号をもらっていたが、法印昇進の際に「啓迪院」を正

式の院号とするようになった。

家光には非常に重用され、幾多の功のあったことが記録に残されている。例えば、寛永十年、家光の病気の際、諸医術を尽して効験なく、玄冶が薬を奉り平癒した。このことに対し、翌十一年正月二十九日白銀二百枚を賜わっている。

また慶長十四年の病気の際も、玄冶の治療によって本復し、翌十五年十二月二十六日にこれを賞して山城国葛野、武蔵国都筑両郡の内に於いて采地千石を賜わった。

慶長十七年には、玄冶の示すところの薬方で病のことごとく平癒したことを謝し、その後は時々、「おまえは私の代に挙用した者であるから、躊躇することなく、言いたいことがあれば必ずはばかりなく言上しなさい。」と言うことがあった。その他にも親筆翡翠の絵、丹薬の箱、唐物尻膨の茶入、真壺花入、あるいは黄金、人参、伽羅、錦帛も賜わっている。

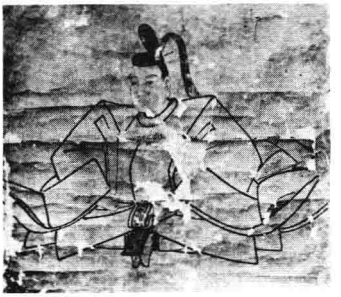

図2　徳川家光公 画像
（「徳川家光公伝」より）

このように、将軍家に重んじられたが、これにまつわる逸話もいくつか残っている。

ひとつは、浅田宗伯の『皇国名医伝』に記載されている家光の痘瘡罹患にまつわるものである。現代文に訳して紹介しよう。

「寛永六年（一六二九）家光（当時二十六歳）が痘瘡に罹患し、

その結痂期に至って酒浴を行おうとしたところ、家光の乳母であった春日局が、『酒浴の法は西土（中国）にあってもいまだに聞いたことがない。これは行うべきではない。』と言った。これに対して誰も答える者がなかったが、玄冶が進み出て次のように言った。『西土にないけれども、日本では行っているということも多くございます。そういうことでやめるというのであれば、何も酒浴に限ったことではありますまい。今行われていないのは、昔の嘉例が一旦途絶えただけなのです。やめて良いのでしょうか。また中国にもちゃんと例があります。ただあなたが御存知ないだけではありませんか。』そして懐から一書を取り出し、『どうぞ惑いをといて頂きたい。これらのことは素人の口出しするところではありません。まして御婦人などはもってのほかです。』と大声で言った。春日局は大いに恥じ、ついに酒浴を行ったということである。」

この記載が真実を伝えているかどうかは定かでない。しかし家光が痘瘡に罹患したのは史実である。記録によれば、寛永六年二月に発症し、閏二月一日に京都に注進され、十日には中宮和子の問病使が江戸に来ている。そしてその月の十五日に第一回目の酒湯が行われている。その後十七日、十九日、二十一日に二番湯、三番湯、四番湯を行い、この月のうちに平癒している。

この逸話は、たとえ作り話であったとしても玄冶の名声、その人柄をある程度伺わせるものである。

もうひとつの逸話は『名将名言記』に出ているもので、家光の偉大さを強調する内容になって

いる。意訳する。

「寛永元年か二年の頃のこと。家光は眩暈を病み、名医が日夜伺候して投薬したところ少験を得た。食も進んで老臣達も皆愁眉を開いたのであった。この時、家光は玄冶を呼び、『食の進むは故何に。』と尋ねた。玄冶は『命は食に在りと申しますように、何の病でも食が進めば自然に癒えるものです。わが君の病もしばらくたてば御平癒されるでありましょう。』と答えた。

ところが、家光の言うには、『それはお前の心得違いである。だいたい人というものは、食が足りなければ形状は衰え、食べ過ぎれば脾胃を損なう故に、過不足なくほど良く行っていれば一身を養うことができる。だから命は食に在りというのである。然るをただ多く食べるのを以て良しと思うは、たいへん間違ったことである。』

玄冶はその言に大いに感服し、ただ今の台命によって始めて古語の深長な理を感得したと述べ、退出した。」

家光が述べたこの程度の知識は、玄冶にとって語る必要のないものであったろう。恐らくは苦笑しながら退出したのではあるまいか。

しかし、これらのことは家光の玄冶に対する親密度を物語っている。一方、彼は将軍家のみでなく、皇室に於いても篤い信頼を得ていた。しばしば禁裏に出入りし、また、寛永十三年二月、東福門院（徳川秀忠の娘、名は和子、後水尾天皇の中宮）御不豫のとき、命により京に赴いて治療を

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

行った記録がある。

玄冶は、前述のように官医としての生活の他に、啓迪院の主宰者として多勢の弟子達の教育に当った。門人の中では、『古今方彙』の著者、甲賀通元(健斎)とその弟景元が著名である。玄冶には著書が多いが、そのほとんどは門人の筆録になる。それだけ多くの弟子達が彼の周辺にあったと考えるべきであろう。

図3　岡本玄冶の墓(祥雲寺)

彼は正保二年(一六四五)四月二十日、病を得て死去した。五十九歳であった。法名を陶出といい、渋谷の祥雲寺に葬られた。後は長子介球が嗣いだ。少し後のことを述べると、この介球は法眼まで昇り、やはり幕府に仕えたが、貞享元年(一六八四)九月二十二日に京都で死亡し、大徳寺玉林院に葬られた。法名は紫溪。介球の後は玄冶の次男祐品が次いだ。

岡本家の墓は二代介球を除き、広尾の祥雲寺にある。東京都の特別史跡に指定され、墓域はよく整備されている。

玄冶の医術

岡本玄冶は曲直瀬流の医術を曲直瀬玄朔から学んだ。玄朔の娘を娶り、啓迪院を号し、道三の

奥義の書を伝うる者は諸品一人なりと称せられた程であるから、曲直瀬流の最も正統とされるものを受けついだのであろう。しかし、彼の医術を道三・玄朔のそれと比べると若干の違いの出てきているのがわかる。

その違いのひとつは単に経時的なものである。つまり、三代の間に積み重ねられた経験が臨床に大きく影響しているということで、それは彼らの治験例を比較してみると明らかである。

もうひとつは、道三から玄冶に至るまでに中国で多くの新しい文献が書かれ、それらが日本にいちはやく輸入されて取り入れられたということである。そして玄冶に於いて最も大きな影響の見られるのは、一五八七年に成った龔廷賢の『万病回春』である。

桐井玄淑の『医範聖意無尽蔵』(一七三七)の巻末の「本朝名医略記」には、朝鮮より『医方考』(一五八四、吳昆)『医学入門』(一五七五、李梴)『万病回春』の三書が輸入されて玄朔の手に入った時に、彼は岡本玄冶、長沢道寿、古林見宜の三人を呼び、それぞれに本を分け与えたことが記載されている。この時玄冶に与えられたのが『万病回春』であったという。

実際、玄冶の処方解説を見ても、治験例を見ても、『万病回春』の処方が非常に多い。後世の『万病回春』の流行や、現今の日本の処方集の中にこの書から取った処方が多いのは、おそらくその端が玄冶に発しているのであろう。

先の長沢道寿にしても玄冶にしても、初代道三からは二世代後の人である。道三の医書は治療

の原則を述べたものが多いが、玄冶や道寿の時代になると処方運用の細かいところまで説明されるようになってきている。この説明の仕方が非常に日本的で、場合によっては本質とは関係がないような記載も見受けられる。即ち、日本漢方の特徴のひとつである口訣の伝統の形成がこのあたりから始まっていると言える。しかし彼らの口訣は、いわゆる方証相対ではなく、症候と処方の理論分析が基本になっている。道三の時代は、明医学を輸入し、日本に定着させることが急務であったが、玄冶の時代は道三流の医術がすでに多くの経験を積み、その集積の上に立って治療を行っていたことが、玄冶の著書からよくうかがえるのである。

玄冶の臨床

玄冶が、実際にどういう治療をしたのかということは、彼の医案集をひもといてみればある程度明らかになる。現在見ることのできる彼の医案集は四種類ある。ここでは、それらの医案集の中から各領域で適当な症例を選び、分折を加えてみよう。現代文に訳して紹介する。

①感染症

当時の死亡原因の第一位は感染症であったと思われる。消化器系の感染症に関しては後にふれるとして、ここでは「傷寒」に代表される急性熱病について、玄冶の治療を探ってみよう。『玄冶薬方口解』に収録されている一三九例の治験例の中で、「傷寒」は一六例と一割を越える。玄冶の

師・曲直瀬玄朔には『医学天正記』という医案集があり、ここでは全症例三七四例のうち三三例を傷寒が占めているから、当時「傷寒」は相当重要な疾患であったはずである。「傷寒」と似た病名に「感冒」「傷風」「中寒」などがあり、いずれも当時の書物に普通に登場する。これらがそれぞれ特殊の疾患を指してつけられた病名であるのか、症状によって分類されたものであるのか判然としないが、恐らくは、その程度と主要症状により名付けられたものであろう。いずれにしても、張仲景の頃の「傷寒」と同じものではなかったと考えられる。

当時のもうひとつの重要な感染症に「瘧疾」がある。これは現在のマラリアに相当する。今でこそあまり見られないが、江戸時代には極く普通の疾患であった。『医学天正記』に三一例の症例が載せられているのに比し、『玄冶薬方口解』では二例しかあげられていない。理由は不明である。

ここでは、最も一般的に見られる「傷寒」の一例を挙げ、検討してみよう。

「男、傷寒、発熱、頭痛、項強、無汗、脈弦数。敗毒散。

玄冶先生が言うには、項が強ばるのは、太陽の経が邪に中ったからである。羌活、独活は太陽の引経薬である。これは理論通りの配剤である。九味羌活湯や十神湯などでも良いけれども、敗毒散ほどの効果はない。もし、敗毒散を用いて熱気が甚だしくなることがあっても、あわててはいけない。敗毒散はそのまま用い、証に随って寒薬を加えれば良いのである。」

この症例は、ごく一般的に見られる感冒様症状である。使用した敗毒散は、『和剤局方』収載の

処方で、人参敗毒散とも呼ばれる。古方家であれば「太陽之為病、脈浮、頭項強痛而悪寒。」「太陽病、項背強几几、無汗悪風、葛根湯主之。」などの『傷寒論』の条文に従い、葛根湯の類を投与するであろう。しかし彼の時代には『傷寒論』は流布しておらず、一般に『啓迪集』に記載されているような、明代の傷寒治療の応用が行われていた。注に見られる「羌活、独活は太陽の引経薬で……」は金元薬理論の典型で、病態生理の説明には道三以来の明医学が用いられており、「傷寒」といえどもその例外ではないことを、この症例は示している。なお、敗毒散を用いてかえって熱のあがるものは症状に応じて寒薬を加えよというアドバイスは、彼の経験の深さを物語るものであろう。

②神経系疾患

神経系疾患のうち、最も多いのは「中風」いわゆる脳卒中である。中風治療に関しては道三・玄朔の時代から、その方針が明らかにされており、玄冶の治療法もその延長線上にある。一例を挙げよう。

「七十歳の男、中風を患い、にわかに意識不明となった。至宝丹を用いてようやく意識はもどったが、話すことはできず、右半身の麻痺があった。脈は弦実であった。

防風通聖散

防風・川芎・当帰・芍薬・大黄・芒硝・連翹・薄荷・麻黄各七分半。石膏・山梔子・桔梗・黄

芩・白朮・荊芥各半匁。甘草・滑石各一匁半。生姜を入れる。

これは、まず至宝丹や蘇合香円などを用いて気をとり立てるのが良い。総じて中風にはまず八味順気散や小続命湯の類が行くものである。古人も中風にはまず八味順気散の類を用いて気道を疎通してから風薬を用いるのが良いと述べている。

しかしながら、この患者には八味順気散の類を用いても効きはしない。いかに気力をとり立てようとしても、風熱が強いのでそれができないのである。まず防風通聖散を用いて風熱が去ったなら、その後は気力をとり立てる治療が良い。このことは脈に気をつけて判断しなければいけない。

例えば、凹んだ所に水のたまるように、気力が弱ければ邪気が虚に乗じて入るのである。風熱の故に脈は弦なのである。

また除湿湯などを用いるのは一段ぬるい治療法である。今この患者に除湿湯などを用いてみても効きはしない。

急なる時はその標を治す。まず風熱を退けねばならぬ。至宝丹を用いて意識が少しもどったといってもわずかのことである。物を見せても、見たことがあるかなという程度のことでしかない。風熱を退けなければ、気力をとり立てても何にもならない。さて、この処方で風熱も去り、脈もやわらいだなら、気力をとり立てる治療が良い。四君子湯、六君子湯に羌活、防風、あるいは当帰、川芎、あるいは天南星の類を証に従って加減して用いるのが良い。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo